

## 五箇地区むらづくり推進協議会

### 西勝原地区環境保全整備事業

#### ①西勝原区共有地景観整備

#### 1. 基本データ

- (1) 地区名 五箇地区
- (2) 地区人口 67人
- (3) 面積 146k㎡
- (4) 地区の沿革

五箇地区は、市街地から約8km東南の位置にあり、西は「日本百名山」の「荒島岳」、東は赤兎山と白山連邦、岐阜県に接し、面積は146k㎡と広大な林野を占める地域。上打波、下打波、東勝原、西勝原の4集落からなっている。

#### (5) 実施主体

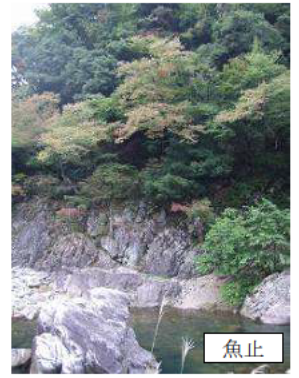
五箇地区むらづくり推進協議会



#### 2. 現状と課題

地区内には、スキー場（現在は閉鎖）やキャンプ場のアウト・ドア・レジャー施設が整備されるとともに、景勝地「刈込池」や「仏御前の滝」、九頭竜川の「魚止め」等、風光明媚な景色が点在しており、訪れる旅行者を目的とした民宿業も盛んに行われていた（現在は1軒が営業）。

かつては、小・中学校やJAの支所も置かれていたが、相次ぐ災害やダム建設の移住による人口減少や各組織の再編計画の中で、順次役目を終え廃止されていった。



現在は、JR勝原駅のある西勝原区を中心に、東勝原・上打波・下打波の4集落に36世帯67名が生活をしている。また、無雪期には、何人もの村人が市街地から畑や山仕事のため通ってきており、神社では祭りも催されるなどしている。





しかし、通年在住者のうち65歳以上が46名を数え、高齢化率の進行が68.7%と顕著であり、いわゆる“限界集落”となっている。2007年に国土交通省から公表された限界集落の実態によると、全国には7,878ヵ所もの限界集落が存在し、今後さらに増加すると記されている。過疎の問題が言われて久しいが、当地区は市街地からも遠いこともあり、その解決策を見いだせないまま人口流失が続き、少子高齢化社会が到来してしまった。

このような中、地区内では、むらづくり推進協議会が実施する「花いっぱい運動」により、JR勝原駅周辺を季節の花で飾り、五箇地区への訪問者を出迎えたり、近所の婦人によって30年ほど前から植樹された花桃並木が、春になると“桃源郷”として注目を集め、満開の季節には遠く中京や関西から観光客が訪れるまでになるなど、「豊かな自然を活かした交流」を目指して、地区住民が一体となり“ふるさと五箇”の活性化に向けて取り組んでいるところである。



### 3. 事業の内容

今では雑草が生い茂り、埋もれかけている湧水地や不法投棄されたゴミに汚された用水路に階段や遊歩道を設け、来訪者が清流を楽しめる親水空間として再生するほか、“桃源郷”と表現される花桃並木を核に、地区全体に花が咲き誇る花木の里づくりを、住民協働による故郷の環境保全と位置付け、「豊かな自然を活かした交流人口の増加」を目指し、地区の活性化につなげていくものである。



【八幡神社下湧水地の再生 (H22)】



【花桃の若木保全 (H22)】





【東勝原区広場サルスベリ植樹 (H23)】



雪囲い材料木棚



花桃若木雪囲い



花桃園地整備

【花桃植樹地保全管理 (H23)】

平成24年度には、五箇公民館の東に位置する西勝原区共有地が、雑草木や用水から浸水した溜まり水でヤブ化するとともに、伐採した枝や野菜くず等の投棄もされるようになったことから景観整備を行い、隣接する八幡神社下湧水地や花桃園地と合わせて、来訪者が周遊して五箇の自然を楽しめる空間づくりを行うことにした。

#### 4. 事業の成果

共有地の南側に沿って流れる用水の水は、日本百名山荒島岳からの湧水を含み、また、八幡神社下湧水地とも隣接した場所であることから一体感を創出するため、事業の実施にあたっては、五箇の名水が育む湿生植物の観察公園をイメージすることとなった。

とはいうものの、長年に渡り放置していた地に手を加えるのは、素人作業では無理があったことから、最初の作業は地区内の建設業者へ依頼をし、重機を使った整地工や法面整形、専門性の高い石積工や排水工等を施し、池を造成した。

次に、花桃並木の園路脇から池へ花ショウブを移植することになり、この作業については、五箇公民館の講座から自主活動グループとなった「五箇自然の会」の協力を得られることになった。作業日を6月12日(火)として五箇自然の会会長から周知していただいたところ、平日にもかかわらず10人余りの会員が集まり、花ショウブの移植や池周辺の草刈りのほか、花桃園地の除草などにも汗を流していただいた。





花ショウブを植栽する際には、池の底土が思いのほか薄く、その下が粘土質であったこと、さらに石が多く、しっかりとした植え付けができ難かったことから根付きが心配されたが、2週間ほどが経った頃には、ほぼ全ての株に紫色の花が咲き、また、花ショウブに先行して地区住民によって植えられたクワイの葉も青々とした光景は、地区住民と五箇地区にゆかりのある人たちが手を携え、新たな“宝”をつくりあげたあかしとなった。



6月17日（日）には、地区住民総出の草刈作業にあわせ、池周りの法面に防草シートを張るとともに歩道部分には木片チップを散らし、景観を整えた。



さらに、一昨年に地域づくり交付金事業を活用して再生をした八幡神社下湧水地の維持管理として草刈りを行った。



## 5. 今後の展望

近年、花桃が満開を迎える4月下旬には、近隣の地域はもとより中京や関西方面からでも大勢の花見客が訪れるようになったが、「花はあれど団子はなし」で、五箇地区の優れた“宝”を発信する折角の機会が活かされていなかった。

こうしたなか、地区住民に五箇地区にゆかりのある方を加えた「お花見隊」が、来訪者との交流を通じた地域の活気づくりを目的として、4月29日に初めての花桃イベントを開催した。

当日は、自家栽培の芋から手づくりされたこんにゃく田楽やさといも田楽、ぜんざいのほか、呼びかけに賛同して持ち寄られた手づくりのパンなどが、満開の花桃とともに賑やかに並び、振舞われた。事前に十分な告知はできなかったが、早朝から大勢の方にお越しをいただき、10人余りのスタッフが息をつく間もなく対応に追われた。

五箇地区では、地域づくり交付金事業を活用して、長い間に埋もれてしまい、地区住民でさえも忘れかけていた財産に手を加え、地区の“宝”として再生することができた。今後は、この“宝”が輝きを失わず、そして、五箇地区へ人を引き付ける魅力となるように受け継いでいかなければならない。そのためには、むらづくり推進協議会を中心とした、地区住民の手による適切な維持管理が不可欠である。

幸いにも五箇地区には、地区住民が育ててきた“宝”を縁にして集う力強い応援団がいる。地区住民がこの応援団とともに手を携え、『自分たちの共有の財産』であるという認識と、これを守り育てるという取り組みが始まったことにより、“ふるさと五箇”の活性化となり、交流人口の増加にもつながることが期待される。

